

東金町小学校 ICT 支援学生引率参加報告書

1. 視察日

2025 年 2 月 26 日（水） 9:30～16:00

2. 視察先

葛飾区立東金町小学校

3. 参加者

教員 稲垣俊介、ICT 支援学生 3 名

4. 目的

東金町小学校の学校公開オープンデイに引率し、4 年生の学部生たちに教育現場の実際を見学させることが目的であった。特に ICT を活用した授業実践や「主体的な学び」「協働的な学び」をどのように取り入れているかを観察し、今後の学習活動に役立つ知見を得ることを狙いとしていた。

5. 内容

学校公開オープンデイは 9:30 に始まり、16:00 までの間に授業公開と協議会が行われた。参加者はタブレット端末などを持参し、ICT を活用した授業の様子を観察した。また、授業中には QR コードを使った資料の参照など、ICT の活用が随所に見られた。学校公開は自由に見学する形式で、参加者は自分のペースで授業を見学し、教師や他の参加者と意見交換を行った。

6. 授業内容

3 校時目には ICT を活用した授業実践が行われ、クラウド環境やデジタルツールが効果的に使用されていた。生徒たちは ICT 端末を活用して学びを深め、私たちもその進行方法に興味を持った。この授業を見学した学生たちは、ICT が学習の効率化に役立つことを実感し、今後の授業にも積極的に ICT を活用したいと考えるようになった。

4 校時目の授業では「先生も楽しむ授業」をテーマに、教師と生徒のインタラクションが強調されていた。教師が生徒と共に授業を進めることで、学びがさらに深まる様子を見て、教師としての重要な役割を再認識することができた。学生たちは、教師が授業を楽しむ姿勢が生徒にどれほど良い影響を与えるかを実感し、教師の役割について深く考えさせられた。

5・6 校時目の授業は探究活動であり、生徒たちが自分でテーマを設定し、調査や発表を行う形で進められた。この活動を通じて、学生たちは自己表現や問題解決の方法について多

くの学びを得ることができた。特に、テーマ設定から調査、発表に至るまでの一連の流れに対して積極的な関与を見せ、今後の学習活動においても探究的な姿勢を大切にしたいと感じていた。

7. 授業外活動

午後には教師同士の協議会が開催され、授業内容や教育現場での工夫についての意見交換が行われた。協議会では、教育に対する教師の視点や取り組みが共有され、参加学生たちは、教師としての働き方や授業の進行方法、コミュニケーションやチームワークの重要性について深く考える機会を得た。

8. 学生たちの学びと感想

8.1. 全体的な学び

ICT の活用方法について学生たちは大きな関心を示し、今後の学習活動でも ICT を積極的に取り入れていくことを考えているようだった。特に、ICT が学習の進行を効率化し、情報の整理や発展にどれほど効果的であるかを実感できたことが印象的だった。また、教師が楽しみながら授業を進めることが学びにどう良い影響を与えるかを理解し、教師としての姿勢や教育現場の魅力について新たな視点を得ることができた。探究活動においては、問題解決のための方法や発表スキルを学び、自己表現が学びの深さを増すことを実感していた。

8.2. 参加学生の振り返り

A さんの振り返り

今回、東金町小学校での学校公開を通して、特に印象に残ったのは ICT 活動の活発さです。授業参観ではさまざまなクラスを見させて頂きましたが、先生によって使っているツールが異なり、児童も当たり前のように使っている姿が印象的でした。

特に 1 年生の生活科を 1 時間通して見学していましたが、スムーズに操作して先生の指示通り課題を提出し、それを元にグループワークをする様子がありました。授業の構成としては、児童一人一人の個別学習とグループでの話し合い、クラス全体共有が軸になっており、ICT を活かして効率化しながら対話的な場面を設けることで、児童の学びが深まっていると感じました。

また、タブレットの正しい使い方や規律を重要視している点も興味深かったです。先生の話を聞く時はタブレット画面を前に向ける、各教室に掲示されたルールを守るなど、端末活用のためには明確なルールが必要であることを改めて実感しました。

B さんの振り返り

東金町小学校のオープンデイに参加して最も印象的だったのは、先生方が ICT の活用を恐れていないことでした。新しいツールを使ったり、児童に端末を操作させることはリスクもあるため、多少は躊躇してしまう部分があると感じていました。しかし、東金町小学校の

先生方はツールについて理解した上で「とりあえず試してみる」姿勢を大切にしていることが協議会を通して伺えました。

また、ICT を活用する目的が明確なことも印象深かったです。授業の中で ICT を使うこと自体が目的なのではなく、児童が社会に出た後の生活を見据えて多くの情報に触れ、その中から選択する機会を与えようとする明確な意図がありました。さらに、端末の規律については低学年では明確なルールを示し、高学年では学級でルールを決めさせることで活用の幅が広がっているとのことでした。ICT を活用するにあたって、学校全体で地盤をしっかりと築いている点が非常に学びとなりました。

C さんの振り返り

東金町小学校でのオープンデーを通して特に印象に残ったのは、どの学年の児童も教師も ICT を当たり前のように授業で活用していた点です。

まずは ICT 機器を使うこと自体になれることも必要ですが、東金町小学校ではどのクラスでも ICT が授業のねらいを達成するための「手段」として当たり前を活用されているところに驚きました。

多くのクラスが「一人で考える（もくもくタイム）」「周りの仲間と話し合う（もしもしタイム）」「クラス全体で考えを共有する（なるほどタイム）」といった時間を分けており、その中で ICT が効果的に取り入れられていました。

背景には、先生方の「失敗を恐れず積極的に活用する」「他の先生方の ICT 活用をまねる」「分からないことは得意な先生に聞く」という学校全体のチームとしての取り組み姿勢があることを最後の協議会で感じました。

私自身、4 月からの教員生活に不安がありましたが、ICT 活用に限らず「失敗を恐れず、助けを求めながら挑戦していく」という姿勢を改めて大切にしたいと思います。

9. まとめと今後の展望

東金町小学校の学校公開オープンデーは、学生たちにとって教育現場を実際に体験する貴重な機会となった。ICT を活用した授業や探究活動、教師と生徒の関わりを通して、学生たちは今後の学びに対する意欲を高めることができた。

今回、新たに学生一人ひとりの感想が加わったことで、ICT 活用の具体的な様子や学校全体の体制づくり、教師の姿勢などについて、より鮮明に共有することができた。今後も学生たちはこの経験を基に学びを深め、将来に役立つスキルを身につけていくことが期待される。

ICT 支援学生の研修と派遣の報告

1. はじめに

令和 6 年度に実施された ICT 支援学生ボランティア活動は、ICT 活用の理論と実践を兼ね備えた教員を養成することを大きな目的として行われた。附属小学校や附属中学校の授業・校務のなかで学生がタブレットやクラウドツールを活用したサポートを行うと同時に、学生自身が現場ならではの気づきと実践的スキルを獲得する貴重な学びの場として機能している。令和 6 年度はこの取り組みが 2 年目を迎え、後期以降は「教育ボランティア」として位置づけられ、所定の条件を満たした学生には「社会参加実習」の単位が認定されるようになった。



本報告書では、研修と派遣の概要、実施した主な活動内容、さらに視察や資格取得に関する取り組みの様子をまとめる。あわせて、学生が活動を通じて得た学びや考察をリフレクションの形で紹介し、今後の展望に繋げたい。

2. ICT 支援学生研修と派遣

令和 6 年度における ICT 支援学生の研修と派遣は、以下のように進められた。

【概要】

- ICT 活用の理論と実践を兼ね備えた教員の養成を目的として、ICT 支援の教育ボランティアを行う学生に研修を実施し、附属小・中学校でボランティア活動を行った。
- 令和 6 年度は 2 年目にあたる。後期より「教育ボランティア」の活動として位置づけられ、所定の条件を満たせば「社会参加実習」の単位を授与する。

【研修】

- 派遣のための研修を 6 月 19 日、26 日、7 月 10 日、17 日、24 日、10 月 9 日、16 日、30 日、11 月 13 日、12 月 4 日、18 日、1 月 14 日、29 日の計 13 回実施。前期は 16 名、後期は 7 名が参加。
- 研修内容は、派遣先の学校での業務内容の共有と、その改善策の検討を教員がファシリテーションしつつ、学生同士で話し合いながら実施。
- 附属中学校への派遣前視察や、東京都葛飾区立東金町小学校への ICT 活用先進校視察（2 月 26 日）、Google 教育者認定資格の受験に向けた研修や受験補助も行った。

【ボランティア活動】

- ICT 支援学生が附属小学校においては月～木曜の朝の活動・授業・休み時間を中心に

支援し、附属中学校では月・水・木曜に授業時や休み時間のタブレット使用状況の確認やトラブル対応を行った。

このように、授業や学校行事のみならず、端末管理、クラウド上での宿題提出、教員間の情報共有などに ICT が組み込まれる中で、学生が多様なサポートを提供してきたことが本取り組みの特徴である。

3. 研修の実施概要

研修は主に二つの柱を持って進められた。第一に、**Google Classroom** や**ループブック**など、具体的なツールやプラットフォームの機能を学ぶ演習的な学びである。第二に、活動先での具体的な課題を学生同士で話し合い、より良い支援に向けたアイデアを出し合う協議会的な場である。前者はスキルアップと ICT リテラシー強化が目的とされ、後者は学校ごと、学年ごとに異なる実態や悩みを共有することで、学生が相互に学び合う機会を創出するために行われた。

さらに、附属中学校での**派遣前視察**は技術科のプログラミング授業やオンライン共同編集の現場を見学し、実際に生徒が困りがちな操作やトラブルへの対応をイメージできるように工夫された。学期後半には、葛飾区立東金町小学校のオープンデイ（2月26日）に参加し、**ICT 活用先進校の授業公開**と教員同士の協議会を見学する機会を得ることで、より広い視野から自分たちの支援活動を振り返ることを意図した。

4. ボランティア活動の主な内容

令和6年度に ICT 支援学生たちが行った支援内容を大きく分けると、次のようになる。

1. 附属小学校でのサポート

- 低学年：写真や動画撮影、QR コードの読み取りなど、端末操作そのもののサポート
- 中～高学年：調べ学習時の検索キーワード指導、Canva でのプレゼン資料作成サポート、Classroom への提出や共同編集の補助

2. 附属中学校でのサポート

- 授業：技術科でのプログラミング学習支援、理科での実験記録（写真・動画）、英語や国語での共同編集レポート作成
- 休み時間：SNS や Web 検索の使用状況確認、トラブルが起こった際の一次対応・教師への連絡

どの場面においても、学生は「自分たちが支援に入ることで、子どもたちがさらに学びに集中できるようにする」という視点を意識しながら、機器操作の補助だけでなく、学習活動そのものを見通した声かけを行うことを目指した。

5. オープンデイ視察（葛飾区立東金町小学校）

令和 7 年 2 月 26 日に行われた東京都葛飾区立東金町小学校の学校公開オープンデイには、ICT 支援学生有志が参加した。ここでは、児童がタブレット端末を使って情報を集めたり、QR コードで教材にアクセスしたりする授業実践が随所に見られた。また、探究活動の発表会や先生も楽しみながら行う授業づくりの工夫など、ICT を活用した協働的・主体的な学習を観察する貴重な機会となった。午後の協議会にも参加し、教員同士が意見交換し合う熱量を肌で感じることで、自らの ICT 支援活動にも新たな視点が得られたと多くの学生が語っている。

6. 学生リフレクションからの学び

今回の活動を通じて、多くの学生が定期的にリフレクションを記し、研修の場で共有した。ここでは、その中でも特に考察が深く、教員としての在り方を示唆する内容が豊かだったものをいくつか紹介する。

6-1.A さん（第 3 回リフレクションより抜粋）

「算数の授業を補助しながら、端末で撮影した板書を共有して復習に活用する様子を初めて見ました。一部の児童は操作に戸惑い、“どこにアップロードするの？”と混乱する場面もありましたが、時間をかけて声かけし、必要に応じて画面を一緒に見ながら指導すると、意外と早く慣れる子が多いことを実感しました。一方で、ふざけて撮影機能を使ったり、授業と無関係なアプリに触ろうとしたりする様子も目立ちました。ただ、それも興味や関心があって端末を触っている証拠なので、『ダメ』で終わらせるのではなく、次にどんな活用ができるか、どんな面白い学びに繋がられるかを一緒に考えていくことが ICT 支援学生の役割だと思います。」

算数や国語といった教科でのタブレット活用は、子どもたちの興味をかきたてる一方、操作そのものに夢中になり、勉強とは関係のない使い方に走るリスクもあると A さんは指摘している。しかし、それを「遊び」と一刀両断するのではなく、「学びに転換するきっかけ」と捉える姿勢に大きな意義がある。現場での具体的対応や声かけを通じて、その可能性を広げようとする探究心を感じられた。

6-2.B さん（第 11 回研修より抜粋）

「活動の途中から研修に参加しましたが、Classroom での課題配布から評価までを一連の流れで体験すると、従来の紙ベース指導より、教師にとっても子どもにとっても効率化・見える化が進むことに驚きました。特にループリックを導入することで、評価が曖昧にならず、子どもが自分の到達度を客観的に見られるようになる点は大きいと思います。実践の場でこれをどう根付かせるか、今後の研修や支援活動で探っていきたいです。」

Bさんのリフレクションは、学習評価の観点から ICT の活用意義を指摘している。特に Classroom やループリックなどの具体的ツールが、授業の効率性だけでなく、子どもが自分の学びを客観視し主体的に改善する手立てになり得ることを理解している点が優れている。



6-3. Cさん（第12回研修より抜粋）

「自分が活動に入らせていただいている学年以外の様子をなかなか知れないのですが、研修で他の学年や校種の報告を聞くと、ICT活用の仕方や子どものつまづきポイントが全然違うことに気づかされます。今まで『補助していればいい』と思い込んでいましたが、それ以前に、子どもたちがどんな面白さや難しさを感じるのかを想定することが大切だし、それをみんなと共有して次の支援につなげたいと思いました。」

Cさんの言葉からは、支援学生同士の情報共有や意見交換が、自分の活動を俯瞰し視野を広げるうえでいかに大切かが見えてくる。学年や校種によって ICT 活用の度合いや課題は異なるが、それを共有し合うことで、自らの支援活動の質を高める循環が生まれていることを示唆している。

7. 今後の展望

これらの活動とリフレクションを踏まえ、以下の点を今後の課題と展望として示したい。

1. スキル面のさらなる充実

学生たちは Google 認定教育者の資格をはじめ、より高度な ICT 活用のスキル習得を目指している。引き続き研修会や自主学習を通じて、教師として求められる実践的スキルを高めていくことが期待される。

2. 指導法・評価法と ICT の融合

課題の提出や共同編集だけでなく、ループリックや探究活動の振り返りなど、子どもたちの学習を支える仕組みとして ICT をどう位置づけるかが問われる。支援学生自身が授業設計や評価法に関心を持ち、教員と協力しながら新しい授業のかたちを探究していくことが重要になる。

3. 協働的学びの推進

小学校低学年から中学校にかけて、児童・生徒同士の協働作業や発表活動がますます盛んになる。そこに ICT がどのように関与すると効果が高まるのか、現場での具体的事例を収集し、支援学生同士で共有・検討していくプロセスが今後も求められる。

8. おわりに

令和 6 年度の ICT 支援学生ボランティア活動は、前年度よりも広い範囲で授業の中核にまで ICT を取り入れる機会が増えた一年となった。特に、端末操作の補助だけでなく、学習評価や探究活動における ICT 活用、さらには学校行事・委員会活動でのクリエイティブなツール利用など、多面的なサポートが求められ、その分学生たちも大きなやりがいと学びを得ている。

本報告書で紹介したリフレクションに表れているように、ICT は単なる便利な手段ではなく、子どもたちが主体的に学びを深めたり、互いに協働したりするための強力なツールとして機能する。その一方で、ふざけたり遊んだりする「余地」も大きく、教師の巧みなファシリテーションや適切なルールづくりが欠かせない。そこにこそ「教員の専門性」が発揮される場面が広がっており、学生たちがその専門性を体感しながら実践力を身につけられることが、本プログラムの醍醐味といえる。

今後も継続して ICT 支援学生の研修と派遣を行い、教育現場における ICT 活用の可能性をさらに探究していきたい。学生同士、教員との協働を深めながら、子どもたちの未来に繋がる学びを支える実践を重ねていく所存である。

第 106 回国立大学教育実践研究関連センター協議会・総会 参加報告書

1. 総会開催の概要

2025 年 2 月 21 日（金）に東京学芸大学総合メディア教育館にて、第 106 回国立大学教育実践研究関連センター協議会・総会が開催された。本協議会は、国立大学の教育実践研究関連センター間の情報共有と連携を深めることを目的としており、各大学の教員や関係者が一堂に集まって活発な意見交換を行う貴重な場となっている。今回は総会に出席し、会計報告や次年度の運営方針などを含む重要な議題について学ぶことができたため、その経過を以下にまとめる。

2. 2 月 20 日（木）の役員会について

2 月 20 日（木）の 15 時から 17 時にかけて、東京学芸大学中央 5 号館（ICT センター）西棟 3F「新たな学びの部屋」とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式で役員会が行われた。筆者はこの役員会には参加していないが、後日配布された議事資料や関係者の報告によると、2025 年度予算の検討や会費納入のあり方、次年度の行事予定などが主要な議題として取り上げられた。また、メーリングリスト未登録者の登録促進についても確認があり、加盟校内での周知の徹底を図ることが重要だと改めて認識されたという。

3. 2 月 21 日（金）の総会当日の流れ

（1）開会および挨拶

当日の総会は 10 時に開会し、協議会会長の須曾野仁志先生（三重大学）より挨拶があった。国立大学の教育実践研究における連携と情報交換の意義が強調され、各センターが積極的に議論と活動を行うことへの期待感が示された。

（2）審議・報告

引き続き、司会者の進行のもと 2024 年度の収支中間報告と 2025 年度予算案の説明が行われた。会費納入や次年度の運営体制と活動提案など、協議会運営の根幹にかかわる内容が提示され、参加者からは資金の使途の妥当性やさらなる活動促進のための予算配分などについて意見が出された。2024 年度年報の原稿依頼の案内もここでなされ、7 月末までの提出期限や、原稿のフォーマットに関する詳細が改めて確認された。

（3）各センター報告・議論

10 時台後半から 11 時 50 分にかけて、加盟大学の教育実践研究関連センターがそれぞれの活動状況や特色を報告し、質疑応答の場が設けられた。学内外への研修プログラムの実施状況や共同研究の進捗、海外との交流事例など多岐にわたる内容が共有され、互いに得意分

野を補完し合う形で協力できる可能性を探る意義深い時間となった。

(4) ワークショップ：「デジタルストーリーテリング」

午後 13 時 15 分から 15 時 15 分まで、須曾野会長（三重大大学）によるワークショップが実施された。デジタル環境でストーリーを創作・発信していく手法に関する基本概念や、学生の主体性と創造性を引き出す具体例が紹介され、参加者同士の意見交換を通して新たな授業設計や指導方法のアイデアが広がった。実際のデジタルツールを用いた簡単な演習も行われ、体験的に学習できたことで、現場での活用イメージをつかみやすい内容となっていた。

(5) 閉会と次回予定

最後に、今後の予定として 9 月に再び役員会と総会を実施予定であることが案内された。また、総会当日に配布された資料はオンラインで参照する形が取られ、紙の印刷は行わない方針であること、そして eduroam が利用できない場合には大学の学内 Wi-Fi が利用可能であるといった運営面の情報が確認された。メーリングリストの登録促進に関する呼びかけも再度行われ、参加者同士のより円滑な情報交換のために必要な対応が求められた。

4. 今回の参加を通じた所感

今回の総会は、協議会の会計状況や翌年度の運営計画など、組織運営の基盤に関わる情報を共有し合うと同時に、それぞれのセンターが行っている先進的な取り組みを学べる場として大変有意義であった。特にデジタルストーリーテリングのワークショップでは、教育技術の発展がもたらす新たな学習方法を実感すると同時に、こうした技術と実践との橋渡しをどのように進めるかが今後の大きな課題であると感じた。また、コロナ禍以降オンライン化が進む一方で、対面の議論が持つ熱量や人的ネットワークの構築の重要性も依然として大きいと再確認できた。

5. まとめ

以上が第 106 回国立大学教育実践研究関連センター協議会・総会における報告となる。会員校同士の連携や情報交換をさらに深めるためにも、年報の提出やメーリングリストへの登録など、実務的な部分を着実に進めていくことが必要だと感じた。今後も総会やワークショップを通じて蓄積される知見を積極的に学び、本学教育学部附属教育実践センターの教育実践や研究の向上に活かしていきたい。

やまなし情報教育推進室 先進地域視察報告書

1 視察日時

令和7年2月13日（木）の12時50分から17時まで

2 視察先

京丹波町立和知小学校

3 訪問者

三井一希、今澤格（甲府市立国母小学校）、稲垣俊介

4 目的

第一に、LDX（リーディングデジタルトランスフォーメーション）の概念を基盤とするICT活用や校務DXを先進的に推進する現場を視察し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどのように一体化させているのかを具体的に学ぶことである。第二に、京丹波町立和知小学校が研究主題として掲げる「主体的に学ぶ児童の育成」の研究会で公開される授業や研修内容から、単元の指導計画やルーブリックの活用方法、振り返り活動の工夫などを吸収し、自校の授業改善および教員研修の充実に反映させることを目指す。第三に、大学と小学校の連携可能性を探りながら、ICT教育や校務DXの実践・展開に関わる課題や協働体制づくりの手がかりを得ることを意図している。

5 内容

(1) 研究会概要

2024年度公開授業研究会が当日実施されていた。受付や全体会、学習指導案の配付など一連の手続きがWeb上で行われ、参加者はタブレット等のICT機器を持参して学会に臨む形となっていた。申し込みもQRコードやオンラインフォームを活用するなど、校務DXの実践が運営面にも生かされている。研究主題である「主体的に学ぶ児童の育成」の核として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立が明確に掲げられていた。児童が自ら学習のめあてを考え、学びを深める過程で相互に意見を交換し合う環境を整えるために、汎用的なソフトウェアやクラウド環境を活用する姿勢が強調されていた。発達上の特性に応じた支援が必要な児童や、言語・家庭環境の面で配慮を要する児童、不登校傾向の児童など、学級に多様な子どもたちが在籍している背景を踏まえ、一斉指導だけでなく個別最適化を図りながら学び合いを活性化する授業づくりが行われているという説明があった。

(2) 公開授業の様子

1年生の国語科「どうぶつの赤ちゃん」では、ライオンやしまうま、カンガルーの赤ちゃんを読み比べることで情報を分類・整理し、動物ごとの共通点や違いを見つけながら興味や関心を広げる学習が展開されていた。導入段階で単元計画やルーズリークを子どもたちと共有し、ICT 端末を用いて文章中のキーワードを拾い、観点別に整理し合う活動が組み込まれていた。一人ひとりの読み取り方の違いを楽しむ姿が印象的であり、友達の読みを参照することで「自分はここに気付かなかった」という発見が生まれる場面が多く見られた。こうした活動を通じて「もっと読み比べたい」「異なる動物も調べてみたい」といった探究心が引き出されている様子であった。

4年生の理科「水のすがたとゆくえ」では、水が蒸発する温度の問題を中心に、常温下でも確かに蒸発が起こっているという事実をどのように理解し、具体的に何度くらいから蒸発が生じるのかを予想と実験によって確かめる学習が行われていた。子どもたちは生活体験や既習知識を根拠に自分の仮説を発表し合い、温度計測を通じて数値のズレを可視化する過程に ICT を使ってデータを集約していた。話し合いの中で「こんなに低い温度でも蒸発しているなんて」という驚きの声があがり、実験に向かう探究心をさらに高める工夫が効果的に機能していた。

(3) 授業見学後の研修・講演

公開授業の見学を終えた後、全体会・研修として京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構 教職キャリア高度化センター講師の大久保紀一郎先生による講演を拝聴した。演題は「主体的に学ぶ児童の育成に向けた和知小学校の取組」であり、同校の授業づくりや日常的な研究実践を大学の視点からどのように捉え、分析し、さらに深めていくかが主なテーマとして提示された。大久保先生は、子どもの主体的な学びを保障するためには、単元の開始時点で学習内容や評価基準をしっかりと可視化し、子ども自身が目標や課題を意識できる仕組みを組み込むことの重要性を強調していた。特に、和知小学校が取り入れているルーズリークの活用やクラウド上での情報共有については、児童と教師双方が随時振り返りを行いやすくなる利点があると評価していた。また、個別最適な学びと協働的な学びのバランスを取るためには、一人で取り組む時間と友達や教師と対話し合う時間を明確に区切りながら往還する構成が効果的だと述べており、ICT はその橋渡しツールとしての力を十分に発揮しうると語っていた。

大久保先生の講演後には質疑応答や意見交換の時間が設けられ、大学と小学校とのさらなる連携方法や、校務 DX の具体的な運用、学習支援ソフトの活用事例などについて活発なやり取りがなされた。本校の実践を参照しつつ、学級の規模や児童の学習環境に応じて ICT をどのようにカスタマイズするのか、あるいは研究発表会や外部機関との連携をどの程度の深度で行っていくのかといった論点が共有され、今後の発展可能性が感じられる場となった。

6 所感

京丹波町立和知小学校における LDX と校務 DX の取り組みは、学級の子どもたちが自分のめあてを持ち、他者の視点を取り入れながら学びを深める場を創出するうえで大いに参考になると感じた。公開された授業では、ICT 端末を学習の基盤として位置付け、ループリックを提示して子どもたちが到達度を意識しやすい仕組みを確立していたため、児童同士の対話が活発になり、「もっと知りたい」「もっと話したい」という主体的な姿勢が育まれていた。個別最適化と協働学習を両立させるためには、単に端末を導入するだけでなく、学習プロセスの共有や振り返りを重視する授業設計と、校務のデジタル化を背景とした教員同士の連携が欠かせないという示唆を得た。

授業見学後に行われた研修では、京都教育大学の久保紀一郎先生が学術的観点から本校の実践を位置付けながら具体的な指導の工夫を説明して下さった。和知小学校が担う役割は、児童にとっての主体的学習の舞台を整えるだけでなく、大学や地域と連携しながら教師同士が研鑽を重ねる拠点としての機能を果たす点にあると改めて認識した。こうした先進的な取り組みを目の当たりにし、大学側としても教員養成や研修の段階で ICT 活用や校務 DX の重要性をさらに体系的に取り入れる必要があると考える。

多様化する子どもたちのニーズに応じるためには、一人ひとりが自分の学び方を見いだしつつ、仲間や教師から刺激を受ける協働の機会を数多く設定することが不可欠である。本校の実践はそうした両面を ICT で支えようとしており、大学と学校現場が今後連携を深める際の先行モデルといえるだろう。今回の視察で得た知見をもとに、本学でも教員養成カリキュラムや現職教育プログラム、さらに地域の産官学の協働プロジェクト等を検討し、双方にとって新たな成果を生み出すような連携を模索していきたい。

山梨大学教育学部附属教育実践総合センター やまなし情報教育推進室 先進校視察報告書

- 1 視察日 2025 年 2 月 13 日
- 2 視察先 京都府 京丹波町立和知小学校
- 3 報告者 今澤格（甲府市立国母小学校・教諭）

4 視察内容

（1）公開授業の視察

和知小学校では「主体的に学ぶ児童の育成」を研究主題に、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業研究に取り組んでいる。今回は1年生国語科と4年生理科の授業が公開された。

1年生の授業は、教材文「どうぶつの赤ちゃん」を使った、「読むこと」を中心とした学習であった。児童は共通点や相違点、事柄の順序など、情報と情報との関係を、ライオン、シマウマ、カンガルーの3者の情報を比べて読むことを通して理解する。また読んでわかったことや感じたことを他者と伝え合う活動も設定され、全8時間で計画されていた。本時の授業は5時間目。カンガルーの赤ちゃんについての文章を読み、これまで学習してきたライオン、シマウマと比べ、共通点や相違点など気づいたことを話し合う活動が行われた。

授業の最初、現在学んでいるキーワードが「比べる」であること、そして今日のめあて（学ぶこと）が「カンガルーの赤ちゃんの違いを読み取ること」だと担任から確認があった。その後、本時の学習の流れを確認し、学ぶことに応じて一人ひとりが本時のめあてを設定しワークシートに記入した。「教科書に線を引いて、ロイロノートで交流する」や「赤ちゃんを比べて、調べる。そのためには友達のかえに…」など自分のめあてを全体の前で発表する児童も数名いた。

その後、全体で確認した流れの通りに活動が続いた。①音読をする。②教科書にある注目すべき情報に線を引く。③ロイロノートにカンガルーの情報を整理し他者と交流をする。ロイロノートにはあらかじめ動物たちの情報が書かれた付箋と整理するための表が用意されており、子どもたちは本文を読んで表に当てはまる情報を画面タッチで操作していた。授業後半は、読んでみて気付いたことを全体で確認した。数名の児童が黒板に貼られたカードを使って、「生まれたばかりの様子」と「大きくなる様子」の2つの視点で表を整理した。本文にあった「一円玉」や「六ヶ月ほど」という情報に対して、担任が実際に1円玉を見せたり、カレンダーをめくりながら期間の長さ注目させたりと、実際に量的な感覚に触れる機会が用意され、児童も積極的に確認する姿があった。授業の終わり、児童は本時の振り返りをワークシートにまとめた。

4年の理科の授業は、単元「水のすがたとゆくえ」の9時間目であり、常温で蒸発することを学んだ児童が、蒸発という現象が何度から発生するのかという課題を、実験を通して探究的に解決していくことをねらいとしていた。担任は単元計画をまとめた単元シートを共有し、本単元のねらいや学習の見通しを持たせていた。また、単元シートと連動した学習カードによって児童は本時の課題や流れを確認することができ、そのカードに沿って授業が展開されていった。

授業が始まると、これまでの学習と本時の課題について確認し、児童は本時の課題に対する自分のめあてを設定した。担任はクラウド上で共有される個人のめあてを確認し、学び方として価値づけたい内容をピックアップし、その都度全体に紹介していた。めあての中に「グラフでまとめたい」と設定した児童に対して、前時までに経験した学習を応用しようと考えた前向きな姿を価値づけていた。

次に、本時の課題につながる生活経験を話し合った。児童からはお風呂の話や寒い日の話があり、蒸発は何度から起こるのか予想をし始めた。自分の考えはロイロノートに個々で整理されていった。個人の考えをロイロノートに整理し終わった班から、学習カードに沿って実験が開始された。実験は、水をいれたビーカーをガーゼでおおい、その上にのせたセロハンが曲がることで、蒸発の判断をする。班の中で水の温度をどうするかを決めた後、用意されていたお湯を使って設定した温度の水を作り実験を行った。

実験を進める中で、予想よりも低い温度で蒸発をしていることに気づいた班は、もっと低い温度で実験したいことを主張し、氷を使った冷たい水での実験を行った。予想よりも低い温度で蒸発している事実を確認できた班からは驚きの声が上がリ、自ら進んで実験に取り組もうとする姿が多く見られた。班ごとに実験を進める中で、担任はそれぞれの班の実験の様子や残り時間から、全体として共有すべき内容やより実験の視点が深まるような声掛けをしていた。

授業の終末、今日の学びをロイロノートに振り返った。学習カードに書かれたループリックを使って自己評価を行い、実験からわかったこと、設定した自分のめあてが達成できたのかを文章にまとめていた。担任からは、本時に学びたかった内容の確認と、それぞれの班が主体的に実験を進めていたことに対し肯定的なフィードバックをしていた。

(2) 全体会

和知小学校の校内研究の概要とこれまでの研究のあゆみについて、大きく4つの視点で説明があった。まず、研究主題である”主体的な児童の育成”に向けて「①学習の見通し」を持たせること。見通しをもたせるために、単元計画・学習計画・評価を授業者と児童は共有している。現在の様子として、6年生国語「海のいのち」では、教科書からどんな学びが必要なのか読み取り、自ら学習を計画していく自律した学習者としての姿が見られるようになった。次に「②問いを持たせる」こと。単元を通して「学ぶこと」を知った児童は、学習内容に対しそれぞれが異なる問いを持つ。この問いは、児童一人ひとりが設定する”めあて”につながる。そして学習を”振り返る”ことで、個別最適な学びが動き始める。また「③学習方法や環境の選択」を保証することで、児童の学びが止まらない環境づくりを心がけてきた。そして「④校務DX化」によって、職員間の情報交換の質が高まり、きめ細やかな指導につながっている。

次に今回公開された1学年の授業の事後研究会が行われた。授業者からの振り返りは、

- ・端末の活用は、1年生にとって有益な形を考え、試行錯誤してきた。
- ・タイピングの難しさを実感し、改めてノート活用の在り方も考えている。
- ・本時では単元で身につけたいこと、考えていきたい「問い」を最初に共有した。
- ・赤色と青色で情報を分類することにしたが、情報整理に戸惑っていた子も多かった。
- ・「比べる」ができていなかった児童への対応が不十分であった。

グループごとに意見交換が行われ、以下のような意見が挙がった。

- ・授業者の役割について。学びが動き出さない児童に対しどう働きかけることができるのか。
- ・ICTの活用状況をみると、学級の実態に応じてアナログの選択肢も必要だった。
- ・1年生でも他者参照をする姿があった。他者の意見を見て「なんで？」とつぶやく児童がいた。感じた疑問を広げ、自分の学びを豊かにできる児童を育てたいし、そこに気づき価値付けられる教師でありたい。
- ・学習の流れが決められていたが学習の流れ自体を委ねることも重要。またデジタルに全部を委ねるのではなく、直接的に言葉を交わす機会をどうデザインするかも協働的な学びにおいて大切であった。

5 所 感

児童が持っている「学ぶ力」を引き出し、主体的に学ぶ児童を育てていくためには、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を意識した学習者主体の授業実践が重要になると実感した。また、個に応じた学びの機会を保証する個別最適な学びを実現しながら、「深い学び」につながる教科の学びの質も保証するためにはどうしたらいいのかを深く考えさせられる視察となった。以下は今回の視察を通して学んだこと、今後の実践に活かしたいことをまとめた。

・学習者主体の授業づくりにおいて、単元で児童が学ぶ資質・能力(教科の見方・考え方、汎用的な情報活用能力等)から、単元全体の学習の流れをイメージすることが重要。さらに児童がどのように教科の見方・考え方を発揮するのか、深く学ぶ学習者としてどのように自走することができるかを教材研究の段階からイメージする。この視点に立つと、単元で学ぶコンテンツとコンピテンシーの関係性がはっきりする。単元でたどり着きたいゴールが明確になり、単元を通して資質・能力を育成していく授業づくりが意識できるようになる。

・知識・技能の習得中心の場面と、教科の見方・考え方を発揮して課題解決していく場面では、学習者主体の在り方や45分間の授業構成も変わる。学級の実態や学習内容、これまで児童が積み重ねてきた資質・能力に応じて、集団で考えを練り上げていく一斉授業や、ゴールに向かって児童それぞれが学び進める複線型授業や単元内自由進度学習等のバランスを考えることが、学び

の質の保証につながると感じた。さらにこの授業づくりを一回性のものにするのではなく、単元と単元の学びを構造的に把握し、教科で求められる資質・能力をどのように育成していけばいいのかを長期的な視点で捉えることで、教科の質も伴って学びを進める自律した学習者の育成につながる。

- ・個別最適な学びの実現には、今回視察した授業で意識されていた「見通しを持たせる手立て」が重要だと感じた。単元計画やルーブリック等を共有することで、自ら学びを進められる環境を整えることができる。実際の授業ではめあてを自ら設定し、どのように学び進むことが大切なのかを理解した児童は、主体的に課題解決に取り組んでいた。めあてによる見通し、45分間の学び、そして振り返りのサイクルが、自己調整しながら学ぶ児童の育成につながっている。

- ・授業者からのフィードバックが主体的に学ぶ児童の育成につながる。視察した4年理科の授業でも、設定されためあてや実験中の児童の姿の中で授業者が価値づけたいものを、全体の中で共有していた。この積み重ねにより、児童はよりよい学び方を意識するようになり、適切なめあての立て方や振り返りの仕方、協働的な学びの価値について理解していく。児童が持っている自ら学ぶ力を引き出すには、つねに児童に寄り添う姿勢が大切だ。デジタル学習基盤が当たり前となっている現在、より効果的なフィードバックや協働的な学びの実現にも、端末やクラウド環境の活用が大きく関わっていることを実感した。

- ・自己調整学習の機会や授業者による効果的なフィードバックに加えて、より教科の学びの質にも注目できる児童を育てるには、授業者は常に「深い学び」の視点を持つ必要がある。単元の序盤や授業の最初に、今回発揮したい見方・考え方をおさえる。45分間の見取りも、価値づけたい学び方だけでなく、「深い学び」にたどり着いている児童へのフィードバックも意識する。一人ひとりが忙しい状況でも、浅い学びで45分間を過ごしていたら、単元のゴールにたどり着くことはできない。求められている授業の形が変わっても、これまでの大切にしてきた「主体的・対話的で深い学び」につながる教材研究が重要なのは変わらない。

- ・毎時間の授業が、単元のゴールにたどり着くためにどのようにつながっているのか、今日の授業が単元全体で見た時にどんな位置づけなのかを共有することも大切。児童とともに現在地の確認をすることで、児童が立てるめあてや振り返り、次回以降の学びの見通しがより本質的なものになる。深い学びを発動するための学習方略を意識でき、質の高いメタ認知を発揮できる学習者を育てるためには長期的な取り組みが重要。教師による足場がけは、足場を外すことまで見通す必要がある。教室にいる学びに対して消極的な児童が、この1年間の中で、前向きに自己調整しながら学ぶ学習者になるには今の段階でどんなことができるか、授業者自身も見通しを持って授業づくりを考えていきたい。

甲府市立西中学校・・・12月10日（火）訪問

訪問者：井坂 健一郎

甲府市立西中学校は、昭和12年4月に甲府市立男子高等小学校としての創立にはじまり、昭和22年4月に甲府市立西中学校として開校しました。現在の全校生徒数は379人です。「知を磨き、豊かな心とたくましい体をもった生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、「一人一人の学力を保証し、願いや夢を実現できる学校」、「自他を尊重し、望ましい人間関係を醸成する学校」、「家庭や地域の教育力を取り入れ、子どもの成長をサポートする、地域と共にある学校」を目指しています。

今回は、芸術身体教育コース美術教育系3年の弘内那乃映さんが、特別支援学級の「書写」の授業で教育ボランティアとして活動しているところを訪問しました。弘内さんが一人一人の生徒に寄り添いながら、個に応じた支援をしている様子が随所に見られました。生徒たちも弘内さんの支援に対してとても喜んで授業に臨んでいました。そのような教育ボランティア活動での姿勢が西中学校でも評価されています。



生徒に寄り添って学習支援をする弘内さんの様子

【教育ボランティア学生インタビュー】

「教育ボランティアをやってみようと思ったのはなぜですか？」

○教師を目指す上で大学での学びだけでなく、現場で教師が働いている様子や生徒の様子を知っておく必要があると感じたため。

「教育ボランティア活動に参加してみて、教職を目指す気持ちに変化はありましたか？」

○教師になるためのステップとして教育ボランティア活動をしていたので、なりたいという気持ちには変わりはない。自分が教師になった時、どんなふうに対応しようかなと想像し目標や今後自分がやるべきことが明確になった感じがしている。

「これから教育ボランティア活動を始めようと考えている学生へのアドバイスは？」

○学生のうちに教育現場に携われる貴重な機会だと思います。自分のなりたい姿について考えながら活動すると力に繋がると思うので、目標を持って活動してみましょう！

【中込 幸雄教頭先生のお話】

本校では、数年前から大学生の皆さんが教育ボランティアとして関わってくれています。昨今、特別支援教育へのニーズも大きくなり、今まで以上にきめ細かな支援を求められる中で、本校でも、学生ボランティアさんに特別支援学級に多く関わってもらい、生徒との関係を築きながら学習面だけではなく心理面でも支援をもらい、たいへん助かっています。

また、教員を希望する人が減少傾向にある中で、学生のうちから長いスパンで定期的に学校現場に関わることは、教育実習とは異なる視点での気づきにもつながり、今後の進路を決める上で大きな経験になっていると思います。学校現場で学ぶ機会を、今後も活かしてください。

教育ボランティア活動を受け入れ、様々なご配慮をいただいている西中学校の先生方に感謝いたします。また、当日はお忙しいところをご対応くださった教頭の中込幸雄先生にあらためて御礼申し上げます。

■ 4・5月の主な行事予定

4～5月の 行事予定

山梨大学教育学部の
関係行事を含みます

研 修

○期間採用者等研修—教師力スキルアップ研修—

5月17日(土) 8:30～12:30・・・期間採用、全学年

教員採用試験対策講座

○時事通信出版局による模擬試験 2

4月12日(土) : 13:15～17:30・・・今年度教採受検者

○長野県教育委員会説明会

4月15日(火) : 15:00～16:00・・・全学年

○二次試験対策講座 1

4月22日(火)、4月24日(木)・・・今年度教採受検者

○スキルアップ講座 1～問題行動の子どもの実態～

4月25日(金) : 16:30～18:00・・・今年度教採受検者

○山梨県公立学校教員選考検査説明会

5月7日(水) : 15:30～16:30・・・今年度教採受検者

○教員採用試験願書作成指導 (全体)

5月8日(木) : 10:40～12:00・・・今年度教採受検者

○徴典会塾 : 4～8月 (土曜日開催)・・・今年度教採受検者

○スキルアップ講座 2～防災教育～

5月9日(金) : 16:30～18:00・・・今年度教採受検者

○集団討議対策講座

5月15日(木) : 13:30～ 15:50、16:00～ 18:30・・・今年度教採受検者

○スキルアップ講座 3～教採合格者の練習方法～

5月30日(金) : 16:30～18:00・・・今年度教採受検者

進路支援

○進路支援ガイダンス

4月1日(火) 13:00～14:30・・・4年全員、M2、M1、S1
(ウォーミングアップ講座 3 含む)

4月2日 (水) 13:00～14:00・・・3年全員

4月2日 (水) 14:00～15:00・・・2年全員

○新入生合宿研修

4月25日(金)～4月26日(土)・・・1年全員

○1年生学生面談

5月7日 (水)、5月14日(水)、5月21日(水) : 13:00～16:00

教育ボランティア

○教育ボランティアスタートセミナー

4月9日(水) 13:10～15:10・・・1年、2年

○前期教育ボランティアガイダンス

4月16日(水) 14:50～16:20・・・全学年

※開催日、時刻、実施場所は、変更する場合があります